

<報 告>

モナッシュ大学春期集中英語研修の実践と総括

奥 田 孝 晴

A Report on the English Study Abroad

Program in Monash University

Takaharu OKUDA

Abstract

The purpose of this report is to summarize the content of the English Study Abroad Program which took place in Monash University, Australia from the 21st February to the 21st March in 1999 organized by the Faculty of International Studies. The International Exchange Committee of the Faculty took the responsibility to perform the Program and will need to make some reformation in the next year. Moreover negotiating with Monash University for achieving the new-type of agreement will be indispensable to establish the one-semester's study abroad program scheduled at the year of 2001 finishing after the reorganization of the Faculty.

In this report, I would like to explain by the PDCA — Plan, Do, Check, and Action — analytical method of business management to evaluate the four week's Study Abroad Program in Monash University, and mention some proposals of the future of international exchange activities of the Bunkyo University.

はじめに

国際学部では第1回モナッシュ大学春期集中英語研修を1999年2月21日より3月21日まで、オーストラリア・メルボルン市郊外の同校ペニンシュラ・キャンパス（フランクストン校）において実施した。参加学生は国際学部27名（うち2年生1名、1年生26名、男女内訳は男子4名、女子23名）、当初1週間を奥田と湘南・国際交流室の鈴木育代さんが、また続く1週間を奥田が引率指導にあたるという「部分引率」の形態で行なった。同研修は1997年度に初めて企画されたものだが、前回は参加学生数が8名と、学部主催実施人数に満たず、ゼミ研修旅行の形態で実施し

た経緯がある。今回が事実上、最初の学部主催企画となった。⁽¹⁾同研修はモナッシュ大学の国際交流統括部門にあたるMonash International、そのアジア地域担当機関であるAustralia Asia Contact in Education=AACE、および同大学付属の英語研修センター(English Language Center=ELC)の全面的協力のもとに実施された。「英語研修」とは銘打ってはいるものの、内容は英語スキルの訓練にとどまらず、メルボルン市の市場見学調査やオーストラリアの教育、生活、それにmulti-culturalismと呼ばれるこの国の多様な文化的あり方など、極めて多岐に及ぶものである。また現地滞在ではホームステイ形態を採ったことで、参加した学生は余儀なく英語によるコミュニケーションにインテグレートされるだけでなく、オーストラリアの人々の「ナマの生活」々とも向き合うことが出来た。研修内容は異文化理解やいわゆる国際感覚の研磨など、「英語研修」という言葉だけで包括できない総合性を持っていたと言える。

もともと海外研修には自分を日常と異なった環境下に置き、「異生活体験」を通じて多元的な価値観の存在を知ること、さらにできれば、両者の共存を志向する感性を磨き上げるという重要な教育目標がある。残念なことに、参加学生の一人がエクスカージョン中に落馬事故を起こし骨折するというアクシデントに見舞われたが、幸いにも怪我は軽く、またホストファミリーの献身的サポートもあって、本人も研修を最後まで全うすることができた。⁽²⁾(ちなみに、この時の体験を彼女は一生の思い出となったと語り、今では良い「異文化理解」の機会が持てたと述懐している。)モナッシュ大学における今春の研修は、親切で経験ある現地教師・スタッフに恵まれ、所定の目標をほぼ達成できたと考えている。

1. 教員引率体制の改革—「部分引率制度」導入まで

昨年度ゼミ旅行形態実施の際に学生を引率された小林ひろみ国際学部教授からは、モナッシュ大学側のケア体制が大変整備されたものであることが帰国後に報告されていた。

一般論として、海外研修における学生引率に伴う教員の負担には極めて大きなものがある。教員はその間、ほぼ24時間体制で学生指導にあたらねばならず、それ以外の研究教育活動を放棄することを一定覚悟しなければならない。しかもモナッシュ大学での研修の場合は2～3月という本学の学事日程上押し詰まった多忙期でもあり、相手側の受け入れ体制が盤石のものであるならば、少なくともこの研修に限っては引率のあり方に何らかの改革が採られてしかるべきと考えられた。さらに、後述する学部改組後の「短期留学制度」が発足した場合の対学生ケアの負担増や、あるいは高度の専門性が要求される企画や現地でのリスク管理が必要な企画、すなわち教員引率が絶対的に必要とされる海外研修を将来展開していくことも考慮した場合、今後を見据えての引率余力を確保していくためにも、受け入れ体制がしっかりしている海外研修に限ってはむしろ引率規模を縮小し、引率者の全般的負担の軽減とコスト削減を図ることこそが得策であり、結果として、それが学部が新規の海外研修企画を展開していく可能性を拓けることにつながるとも考えられる。学部国際交流委員会では数次にわたってこの問題を検討するとともに、並行して学部教員を対象としたアンケートを実施した。またモナッシュ大学AACEに対しては、①研修参加学生に対する学内でのケア、ホームステイ先でのケアのあり方、②移動手段・送迎方法の確認、③事故発生時の対処…等に関する質問状(日・英文)を送付し、回答(英文)を文書にて得た。[稿末資料1および2参照。ただし英文のみ掲載。]結果、本研修に関しては参加学生が

現地に順応できるまでの前半2週間に限っての「部分引率体制」を採用することが妥当とし、これを原案として学部教授会、関係委員会に諮ることとした。

同案は1998年9月の定例教授会にて審議され、主に①モナッシュ大学側で参加学生の身体的・精神的ケアが十分になされるか、②文教大学との連絡体制が整備されているか、③研修時間外の事故責任の明示がなされているか等について検討された。その結果、配慮すべき事項として①参加学生およびその父母への主旨徹底と了解を得ること、②「不測の事態」に対する連絡方法の徹底と教職員の派遣、③事務職員の引率補助を依頼することを確認し、同案を承認した。承認に至る経緯は下記表に見るとおり。

表 「部分引率」実施に至るまでの経緯

1998. 3 学部国際交流委員会（小林ひろみ教授報告：引率制度の問題点指摘、審議）
- 4 学部国際交流委員会（引率制度に関するアンケート実施決める）
- 5 アンケート結果：回答数20…引率廃止9，部分引率8，その他3
「部分引率制度」実施可能性検討を教授会にて報告
- 6 学部国際交流委員会（モナッシュ大学AACEに質問状送付決める）→実施
モナッシュ大学AACEより回答受領
- 7 学部国際交流委員会（回答の検討審議、「部分引率」制度提案）
- 9 学部教授会にて提案、承認

なお、同件については大学国際交流委員会への報告後、第1回事前オリエンテーションの際に学生たちに主旨説明を行なうとともに、参加者保証人に対する案内書にその旨を明記し、あわせて事故対策連絡網を付して「研修旅行同意書」の提出を要請した。〔稿末資料3参照〕

2. 事前オリエンテーション

研修実施に先立つ事前指導は、研修概要にかんする情報伝達のみならず、その目的の確認を通じて学生の参加姿勢を正し、参加インセンティブを高めるための教育的機会でもある。事前指導のあり方如何が研修全体の成果を左右することも十分ありうる。27名の参加学生には国際交流室より予め連絡し、やむをえず欠席する場合には必ず事前に連絡をとるよう指示した。（なお、3回にわたる事前オリエンテーションでは国際交流室の鈴木、仮屋さんから学生への連絡、事務事項の説明等にあっていただいた。）

<第1回（12月9日）>

- (1) 研修の目的説明…「物見遊山」ではない、あくまでも教育目標をもった「研修」であることの確認。また英語力の向上だけでなく、異国の文化、歴史、価値観、日本との関係等々にまで及ぶ異文化理解のための多角的研修でもあること。
- (2) 海外での生活への心構え…海外では「自己責任」が厳しく問われる。引率者やモナッシュ大学のスタッフはあくまでも研修の補助者であって、学生といえども「甘え」は許されない。ま

たホストファミリーとのコミュニケーションに努力すること。率直にThank you, Excuse me, Please 等が表現できるように、等々。

(3) オーストラリアの気候、人々の生活、政治状況、そして治安…実際問題としての持ち物に関わる外的環境。また治安が比較的安全と言われるオーストラリアでも夜間の外出が危険なこと、またポーリン＝ハリソン党首の「ワンネーション」党の動きに代表される排外主義的気運がmulti-culturalismのオーストラリアにも少なからず存在すること、等々。モナッシュ大学での研修環境と「部分引率」制度の主旨説明。

(4) 昨年度参加学生の体験談

(5) 事務事項、諸連絡

<第2回(1月22日)>

(1) 基本的な生活習慣…当然のことながら、未成年者の喫煙が違法であること。(オーストラリアでは18才以下だが…) 国際的に見て喫煙者が好ましい目で見られないこと、実質的にも不利益を蒙ることが多いことなどを説明。学生のおほとんどが未成年者であることから、禁煙を指導。

(2) 参加学生の組織化…27名という人数を「機能化」するため3グループに分け、グループ＝リーダーを選出、さらに全体のリーダーを指名。(参加者中唯一の2年生) 情報伝達の経路、点呼方法などを指導。

(3) シドニー旅行時の諸注意…最終2日間は文教大学主催の研修ではなく、JTB主催企画のオプション＝ツアーとなる。シドニーは大都会であり、また研修後の注意力散漫となる時期でもあるため、いっそうの自己管理の必要性をうたえる。

(4) 事務事項、諸連絡

<第3回(2月15日)>

(1) ホームステイに関する注意…海外では「沈黙は金」ではない。消極的態度ではなく、積極的に自己主張することが必要。問題や不満は言葉にして表わすこと(英語がうまく話せなくても態度で分かるはず。) モナッシュ大学のスタッフは親切に対応してくれるので、不満等については研修の終了後ではなく、研修期間中に言葉で表明すること等々。

(2) 「麻薬」問題…最近のオーストラリア都市部では若者の麻薬(特にヘロイン) 吸引が社会問題となっている。興味本位で関わるのが後に重大な結果を招くことを注意。

(3) 事務事項、諸連絡

3. 研修の背景・実施後の印象

研修は前半2週間の「部分引率」期間中に発生した学生1名の落馬骨折事故を除いては順調に推移し、3月21日、学生全員の帰国をもって無事終了した。特に「部分引率」期間に見聞・体験した範囲を中心に、実施の印象をまとめてみたい。

① モナッシュ大学の受け入れ体制と組織的機能分担

特に印象に残ったのは英語初級の学生(学生はほとんど該当)に対するモナッシュ大学の受け入れ体制の充実ぶりで、豊かな経験に裏打ちされた組織体制、洗練された機能分担には感心させられた。AACEは3名の日本人スタッフを中心に到着後のオリエンテーションを行ない、全般的

注意を徹底させてくれた。また、研修を直接指導するELCには短期留学プログラム責任者であるDavid Walton博士（教育学）をはじめ、非英語圏からの学生に対する英語教育のベテラン教師陣が懇切丁寧に指導にあたってくれた。さらにホストファミリーも概ね善良な方々で、その選定についても信頼できるものであった。

先の落馬事故の際には、クラス担当教師が奥田とともに病院へ学生を搬送し、診察手続きをとってくれた。またDavid氏は早速病院にかけつけ、難解な専門用語を逐一分かり易く解説してくれたばかりでなく、ホストファミリーおよびAACEに連絡を取り、時にはジョークをも交えて骨折した学生に話しかけ安心感を持たせる配慮をしてくれた。またホストファミリーは医者意見と当該学生の希望を聞き入れ、ご親切にも研修期間終了までの滞在と通院治療に全面的助力を約束してくれた。少なくとも、今回の事故の際に見られたモナッシュ大学側の「危機管理」の体制は非常にしっかりしたものだ。

② 戦略商品としての「英語教育」

こうした組織体制の構築と人材配置の背景にあるものが、モナッシュ大学が指向する大学自体のグローバル化と「英語教育の商品化」戦略である。前者は後述するとして、特に非英語圏海外学生受け入れで蓄積されたノウハウを活用して、同大学は財政収入の安定化を目指した英語研修制度（ELICOS）を大規模に展開しており、これが大学の財政収入に占める正規学部学生からの授業料シェアを5～6割程度に留めることに貢献している。⁽³⁾ ビジネスライクな言い回しをすれば、「英語教育」は「戦略商品」と言って良い程に重要視されているのである。また研修期間中の各週1回行なわれた校外へのエクスカージョンでは自然豊かな周辺地域への遠出が催され、ビクトリア州の対外ピーアールに大いに貢献している。地元紙「*Helard Sun*」紙（March 2, 1999）が伝えるところによれば、アジア経済危機の影響でオーストラリアの経常赤字は98年に79.6億オーストラリア・ドル（1 AUS\$≒75～80円…1999年3月時点）にのぼったうえ、99年1月には輸出が前年同期比5%ダウンのため貿易赤字額は13.8億オーストラリア・ドルに達したとされる。同国の経済パフォーマンスは比較的良好とはいえ、経常赤字打開の切り札としてのサービス商品開発と観光収入の増大は大ぎょうに言えば「国家的要請」であり、この点からもモナッシュ大学の「英語教育」システムは注目される。最近のアジア経済危機の余波を受けて、モナッシュ大学でもこれまで海外留学生の多数を占めてきたインドネシア、マレーシアからの受け入れ数は減少傾向にあり、これを代替しうるジャパン・マーケットの開拓が次第に重要視されつつあるようである。担当者の個人的親切心とはまた別の次元で、我々の研修自体がそうした学内事情のもとに行なわれているという状況は、客観的に掴んでおく必要があると思われる。

③ ホストファミリーのインテグレーション

この研修の特徴のひとつが4週間のホームステイで、参加学生は現地家庭での滞在を通じてオーストラリアのナマの姿と向き合うことができる。問題はこれらホストファミリーをいかに確保し、「質的な水準」を保ちうるかということだろうが、モナッシュ大学ELCではホームステイ制度維持のために応分のコスト（1週あたり165 AUS \$）を支払うことで、研修での英語教育にも彼らをインテグレートすることに成功している。たとえば、研修においては5～6名の小集団にクラスを分解して、小グループ単位で会話訓練を行なうconversationという手法が多用されたが、そのチューターには各ホストファミリーがローションであたるという具合であった。各

ホストファミリーに一定の教育的力量がなければこうした態勢をとることも困難であろう。モナッシュ大学はまた、ステイ中のトラブルを避けるためにホストファミリーの精選に力を割いており、その意味からも研修のホストファミリーは親日的で、国際的感覚に秀でた人々が多かったという印象を受けた。(もっとも、その精選作業に時間がかかるためか、ホストファミリーに関する個別情報があまりアップトウデイトなものでなかったという点は、来年度に向けて相手側に率直に申し述べておきたい点である。)

4. 春季集中英語研修(4週間プログラム)の協定について

国際学部では同研修に対する単位認定(英語2単位)を行なっていることもあって、その根拠となるシラバスや研修内容を定めたメモランダムとともに、今後の協力関係を維持するうえでも、国際学部とモナッシュ大学との間に何らかの明文化された協定を締結することが望まれていた。訪豪する以前から交渉を重ねてきた結果、引率期間中にAACCE所長(Managing Director)のMatthew Mangan氏と会談し若干の修正を行なった後、3月2日には15項目の条項と4つの付則文書から成る協定に調印する運びとなった。モナッシュ大学側はInternationalの最高責任者で学長のMaloney教授がサインし、帰国後、宮本学部長署名の後に発効となった。当面は2年間(2000年12月)の期間とし、以後は双方に異議が生じないかぎり自動延長される。[稿末資料4参照。ただしボリュームの関係上、英文各条項のみ掲載し付則文書1~4は省略。]なお、同協定は国際学部が学部改組後に実施を検討している「短期留学制度」(1セメスター・プログラム)に関する協定のモデルともなりうるものである。

5. 長期的・一般的協定に関する協議と「短期留学制度」の構築

国際学部では現在、西暦2000年4月を目標として学部改組委員会を中心に改組計画が進んでいる。このうち国際交流マターに関係の深い構想が、新設予定「多文化コミュニケーション・コース」に設定される1セメスター海外研修企画である。同構想では主にこのコース学生を12~16週間の期間海外の大学で学ばせ、そこで履修することができる語学、異文化理解、地域研究などの科目を学部の単位として認定する(事前・事後のオリエンテーションを含めて単位化する)ことを想定しており、システムとして学生の短期的留学が可能となる。また将来的には他コースの学生にも海外事情理解と専門性を備えた多様な「短期留学制度」を準備することで、国際学部学生に海外研修を通じた国際理解インセンティブを付与したいと考えている。現在、具体的な海外研修先調査を進めているが、モナッシュ大学は教育内容の充実ぶりと整備された受け入れ体制からして、その第1候補となりうる。

ただし、モナッシュ大学との連携によって「短期留学制度」を立上げるためには相手側の了解と受け入れの具体的な条件を定めた特定協定を結ぶ必要があるが、その前提として、まずはモナッシュ大学と文教大学との間でそのベースとなる大学間一般協定が必要となるだろう。この交渉をほぼ半年間進めてきたが、モナッシュ大学の立場はかなり微妙であった。現地滞在中に会談した

前述のMangan氏およびMonash Internationalの実質的担当責任者であるReus教授 (Director Monash Abroad)によれば、モナッシュ大学では現在100以上存在する「一般的協定」の見直しを進めているとのことである。大学の将来計画から見て実質的内容のあるもの、(財政的に魅力ある?) 具体的プロジェクトに関わるもののみを残し、その他は整理する方向にある。また、学内の組織的事情から各学部では相互交流のメリットを享受できるなど、よほどの「恩恵」が期待できない限り「一般的協定」には興味を示していないという。したがって、Monash Internationalとしては学部事情に影響を受けない形での具体的プログラムに関わる交流協定を考えたいとしており、我々が当初考えていたような、オーソドックスな形の「一般協定」を結ぶのは困難と判断された。

これに対して、前述の4週間プログラムのように特定の実施計画を射程に入れた協定(特別協定もしくは暫定協定=enabling agreement)は組織内合意が容易で、ELCなど関係機関の協力体制も作りやすく、国際学部が検討している「短期留学制度」にも十分協力が可能との感触を得た。そこで「次善の策」として、可能な限り一般的協定の内容をも含ませるために、モナッシュ大学が玉川大学と結んでいる英語研修に関する特別協定をもとにしたenabling agreement試案を事前に学部国際交流委員会で作成・検討した後、今回はそのコピーを携え、関係各氏にその検討を依頼することとした。[稿末資料5参照]幸い、先の両氏およびELCのDavid氏からは肯定的な評価を得た。また、帰国後の大学国際交流委員会の席上でも特に異議は出なかったので、今後は「短期留学制度」に関する規定やシラバスの作成など具体的な実施課題検討を関係委員会と協力して進めていく一方、学部内外の合意をはかりつつ協定締結交渉を進めていくこととしたい。

6. 総括および評価

① 「部分引率」の評価

落馬事故が起きたのは残念と言う他はないが、その際でも授業担当者、研修引き受け責任者、ホストファミリー等の対応は極めて時宜を得たものであった。先にも述べたとおり、モナッシュ大学側の研修受け入れ体制は非常に整備されており、研修期間の教員引率については向こうもそれほど必要性を認めていなかった。(現に、同大学に研修学生を送り込んでいる日本の幾つかの大学では引率者を派遣していないという。)

ただし、「部分引率」の評価を1回の経験でのみ判断するのは早急に過ぎるのかもしれない。引率全廃の可能性を検討すること自体はともかくとしても、現時点ではそれが十分な学内合意を得られるとは思えない。また、万が一の事故が発生した際に文教大学からの引率者がいるときの当該学生に与える安心感なども考慮すると、部分引率を早急に取り止めてしまうことには問題が残るかもしれない。協定交渉に関する課題も残されていることでもあり、とりあえず次年度については現状の前半引率形態を継続し、その反省をふまえた上で後日に検討することがベターを判断する。

② 事務職員の引率補助について

今回の研修では事務職員の立場から国際交流室の鈴木さんに引率補助をお願いした。鈴木さんには本研修実施以前から相手側との連絡や事前オリエンテーションの企画準備、さらには参加学

生への日常的連絡などを担当していただいていた。年度末の多忙な時期でもあるので、鈴木さんの引率補助期間は1週間と短いものではあったが、現地でも十二分に引率アシストの役割を果たしてくれた。そもそも担当事務者にとって現地に直接出向き、普段は voice to voice あるいは fax to fax でしか接触していない相手を知り、組織事情や人間関係までも理解し、face to face の関係を作り上げることは（本人の疲労は別として）、職務上得るところが大きいと思われる。したがって、1週間とはいえ、事務職員の引率協力が得られるよう来年度も関係者の協力を期待する次第である。ついでながら、将来1セメスターに及ぶ「短期留学制度」が立ち上がった場合の事務負担の増加を考慮に入れたとき、国際交流に関する情報の集中管理の必要性は現在とは比べものにならないほどに大きくなるだろう。それに対応する事務職員の資質向上を図るうえでも、海外研修引率経験を共有していくことは一つの有益な方法ではないか。また大学事務管理当局とは実質的機能面からしても、また国際化時代に必要な人的資源育成の観点からも、国際交流に関わる事務スタッフの増員と組織的再編を強く望みたい。

③ 研修のフォローアップ

本研修の基本的目標を理解せず、海外旅行気分を出かけていく学生がいないか、という点は当初から気がかりな点であった。現代っ子は（あるいは、青年というのとはもともとそういうものなのかもしれないが）とかく自己中心的で我侷な傾向が見受けられる。ホームステイはホテルに宿泊するのとは違う、というごく当たり前のことが分からず、ホストファミリーと小さな軋轢を起こす学生も見受けられた。研修の成果を今後活かしていくうえでも、事後教育の必要性は決して小さなものではない。

もっとも、研修に対する学生の反応は概して良好であった。参加学生たちのナマの声を拾い、それらを次年度以降に反映させていく必要があるので、学部委員会ではモナッシュ大学が行なった評価アンケートとは別個に、2000字程度の感想・反省レポートを課すこととした。〔稿末資料6にその1例を掲載。〕その中で多くの学生が研修の成果として英語スキルの向上とともに、国際社会の多面的価値観の認識とその共存の必要性を、感覚的にせよ、ある程度まで捉えていることに安堵する思いである。

今回研修に参加した学生の多くは1年生であり、研修での体験（感性）を今後は専門科目、ゼミナールなど学部教育を通じて血肉化し、理性的判断力にまで昇華させていくことを期待している。また学部国際交流委員会は彼らの体験記を活用し、将来の研修内容に反映させていく努力を続けたい。

7. 結びにかえて－国際交流関係組織改革への提言

現在モナッシュ大学はオーストラリア国内のみならず、すでにマレーシアにキャンパスを開設した他、現在は南ア等の諸外国にも開設計画を進めているという。ボーダーレス時代にあって大学そのものをグローバル化していくという、同大学のダイナミクスとエネルギーにはしきりに感心させられた。もちろん、サイズにおいても教育方針においても、文教大学はモナッシュ大学とは違う。こちらはこちらで独自の道を追求していけば良いわけだが、ただモナッシュ大学のような多国籍企業を目指さずとも、文教大学も今後予想される国際交流の多様化、広域化、長

期化を考慮した場合、賦存資源に見合う形での組織改革の必要性を痛感する。すなわち、既存の諸プログラムの見直しとともに、国際交流関係組織のあり方を検討し、再編していく政策的努力が今日必要なのではないか。たとえば、現在は越谷・湘南・旗の台に分散管理されている国際交流関係情報を集中管理し迅速かつ総合的な意志決定を行うためには、ある程度は各学部の個別的利害を止揚する形での専門的国際交流統括機関の確立とスタッフの集中が望ましい。モナッシュ大学に習いBunkyo Internationalといった全学的機関のもとに組織再編がなされ、同機関のもとに国際交流事務が統括され、その権限下で国際化戦略が展開されていっても良いのではないか。

無論、権限と責任はコインの裏表の如き関係である。この場合、担当者が応分の責任を負うべき立場にあることは言うまでもないが、組織権限と担当者責任の明確化だけでなく、その際予想される人員の再配置、有効活用を関係機関におかれては真剣に考えて欲しい。

(国際学部・国際交流委員長)

注：

- (1) この研修は国際学部主催として2月21日～3月19日までモナッシュ大学において実施、その後、帰路のシドニー1泊旅行については日本交通公社藤沢支店主催によるオプション・ツアーとした。(同ツアーには全員が参加。)
- (2) 事故の発生状況、対応措置などについては事故発生直後に大学国際交流委員長、学部長、学部国際交流委員会および事務当局に報告。その後、1999年4月国際学部教授会にて報告。
- (3) 1999年3月2日、AAACE Managing Director M.Mangan氏との会談より。

BUNKYO UNIVERSITY

Faculty of International Studies
1100 Nishimagaya, Chigasaki, 253 JAPAN

June 12, 1998

Mr. Matthew Mangan

Director

Australia Asia Contact in Education
Representing Monash International

文教大学

国際学部

〒253 茅ヶ崎南行幸1100
Phone 0467/5632111
Fax 0467/5443722

Dear Mr. Matthew Mangan,

Our students enjoyed your English Language Program tremendously. They say they will recommend it to their friends.

We are planning to participate in your Language Program again this year. However, the recent changes in the economic situation in Japan have brought an increase in escort expenses. Also, our escorts are finding it difficult to stay at Monash during the entire program.

For these reasons, we are considering limiting our professors to escort only for the first 2 weeks (Part Time Escort) and entrust the rest of our program to you.

In order to carry out this new (Part-Time Escort) system, we must clarify a few points, particularly students' security, to obtain approval in advance from the faculty meeting and from the board of directors concerning this matter.

Enclosed you will find a questionnaire. We would appreciate it if you would answer these questions in writing so we can present them to the Faculty. We are sorry to bother you with so many detailed questions, but this information is very important for documenting the security of our students and for reassuring everyone that this "Part Time Escort" system is feasible.

Sincerely,

Takaharu Okuda
Chairman of International Exchange Committee
Faculty of International Studies

1. CIRCUMSTANCES AND CONDITIONS OF ACCEPTING OUR STUDENTS

1. Caring for the English Language Program Participants

- (1) Is it possible to communicate with the person in charge of the AACE in spoken Japanese? How many staff are there in AACE who are able to communicate with our students in spoken Japanese?
- (2) What kind of arrangement does AACE have concerning educational guidance and counseling for students who participate in the English Language Program?
- (3) If there are complaints from students concerning the content of the program or overall living situation, how will AACE handle those complaints?
- (4) In what way will the AACE take action if a student is injured or sick?
- (5) What kind of arrangement does the AACE have in case of an accident to a student during extracurricular activities (an accident which is not due to the fault of the student)?

2. Caring for the students during homestay

- (1) What are the criteria for selecting host families and how do you make decisions?
- (2) What arrangements are made to secure students' safety during their stay with the host families?
- (3) How do the AACE and the host families contact each other? If any trouble occurs during a homestay, how will AACE manage the problem?
- (4) What type of responsibility does the AACE accept for accidents which might occur during activities outside the homestay residence (an accident which is not due to the fault of the student)?

3. Transportation

- (1) How do you intend to transport students for excursions during the study period?
- (2) In case of a transportation accident, while participating in the English Language Program, what kind of arrangements (e.g., first aid, insurance) do you have?

2. IN CASE OF AN ACCIDENT.

- (1) Is there an organization that will respond quickly in case of an accident? In addition, what emergency measures would AACE take?
- (2) In case of emergency, who will be in charge? Also, who will contact us?
- (3) Please give us your frank opinion concerning our idea for a "Part Time Escort".
- (4) In order to put the Part-Time Escort system into practice, would you like to make any changes in the program? For example, would you prefer our students to be included in the regular (mixed) study program?

Signature

Official Title

Date

《資料 2》

File - network\data\code\y\benkyo-qt

Part One
English Language Program.

1. Yes, it is possible to communicate with staff in Japanese. There are approximately, 7-8 full-time staff in AACE, as well as 2-3 part-timers who work at busy times of the year. Of these staff members, including part-time staff, there would be just on or just less than half who could communicate with students in broken Japanese. Generally, for group programs, there is one dedicated coordinator to a program who can speak fluently in Japanese with both students.
2. Students are provided with an orientation session in Japanese at the start of each program. All aspects of the program are covered at this orientation; from course materials and objectives through to homestay. Students are provided with 24 hour bi-lingual emergency on-call service. Students are also provided information regarding contacting AACE bilingual staff during program hours. On most days to a program, AACE staff will attend the campus and make themselves available at designated times (usually in breaks and after classes) for students to come and see to discuss any matters the student requires information or guidance on.
3. If students have complaints about any aspect of the program, they can communicate them directly to AACE staff over the phone or at a designated meeting. All complaints are required to be documented as well in writing in the RR Form - Report and Request Form (in Japanese).
If the nature of the complaint is course related, a report is handed to the academic program manager - a verbal report as well as the translation of the student's RR Form. His findings/response are then communicated to the student. If the nature of the problem is homestay related - same process occurs but it is handled by the homestay officer. Matters outside these two main areas will generally be handled directly by the AACE coordinator.
Complaints, problems and the processes undertaken to resolve them are all documented through a variety of forms and copies are forwarded to staff from the visiting group; whether they be here or in Japan.
4. Injuries or illnesses are reported immediately to the AACE coordinator either by the class teacher, homestay family or the student directly. Written reports concerning injury and sickness are governed by the MARS form. (Medical Attendance Report Sheet; normally completed by the student in Japanese and translated by AACE staff and forwarded/communicated to the family / teacher and/or Doctor) The original copy of the MARS Form is also forwarded to staff from the visiting group whether they be here or in Japan.
5. Any accidents occurring during extra-curricular activities are handled by the staff members on hand at that activity. Extra-curricular activities are attended by teaching staff and if involving transport, then drivers would assist also. Action undertaken would very much depend on that nature of the accident/illness. If medical treatment is required, then that would be arranged immediately. A report would be forwarded to AACE staff to submit to staff from the visiting group; whether they be here or in Japan. All due care shall be forwarded to the student, regardless whether the accident or illness is the student's fault or not.

Part Two
Homestay

1. The criteria for selecting host families are :
 - **Past Performances** / ratings by previous homestay experiences. All students whom any with families, be it short term or long term complete a report on their family and experience in their native tongue.
 - **Homestay Interview performance.** All families are interviewed in their home.
 - **Location / Transportation.** Easy access to and from school be it by public transport, direct assistance from families.
 - **Employment** details of the parent/s, both past and present.
 - **Family Members'** personalities, hobbies, schedules, and their ability to provide a certain degree of attention to the students.
 - **References / Recommendations** from other families and people in the community.
 - **Adaptability and Flexibility** of the Family.
 - **Motivation and Reason** for getting involved in the Homestay Program.
 - **Conditions and Facilities** of the home.
 - **Student's Adaptability/Suitability** as communicated through the application form.
2. Student's safety is enhanced by :
 - selection criteria mentioned previously put in place.
 - 24 hour emergency contact procedure.
 - network of communication procedures between family and AACE.
 - bi-lingual staff.
 - forms and structures which assist with aiding student's welfare during the program.
3. AACE has a designated and specialist homestay officer as well as program coordinators. The homestay officer is in regular contact with families, and he is on-call for families if an emergency arises. The homestays also receive a daily letter from the class teacher which enables them to coordinate their schedules around the student's schedule. One of the keys to a successful program is the integration of homestays fully into the program. Homestays receive orientation prior to the start of a program, daily bulletins directly from their student's class and 24 hour contact with the homestay officer.

If there is a problem within the homestay, the coordinator will translate on behalf of the student and the homestay officer will deal with the problems in a manner best suited to quickly resolving the problem. Depending on the case, the student and family may be counselled separately or together. In the event the problem is unlikely to resolved quickly, the student will be placed with another family.
4. AACE or the University do accept a degree of responsibility for students outside of the Program. The program basically is structured on classes, extra-curricular activities and homestay.

If an accident occurs in the student's free time when they are not with their family or connected to the program, and it is not the student's fault - AACE will assist in every way possible as will homestay families. AACE staff are on call 24 hours a day, 7 days a week and in the event that a student needs emergency attention outside of the program and homestay, staff will attend to that as best and as quickly as possible. AACE staff, in such an event will contact the Academic Program Coordinator as well. Homestay families also are instructed to operate on the basic principle that "act in the same manner with homestay students" as you would act with your own children."

Support and assistance is not decided upon whether it was the fault of the student or not. Support and assistance will always be forthcoming.

Legal and insurance responsibilities that may arise from accidents outside of the program are a total and separate issue. Different insurances cover different incidents. Negligence or degree thereof on someone's part often is the main predetermining factor as to whom undertakes legal and insurance type responsibilities.

Part Three
Transportation

1. Students are transported by a sub-contracted Transport Company officially engaged by the University. Like the strategy of fully involving homestay families into the entire program, transportation staff play an integral role in building a relationship with the students throughout the program. The same drivers are utilised as much as possible.
2. State Law ensures that all transportation vehicles in the state of Victoria are fully covered by full insurance cover and standardised first aid facilities and safety features within vehicles. Transport Licences depend on the full provision of insurance, and safety features and procedures as stated under the State Government Transport Act.

Part Four
Accident

1. In the event of an accident, roles and response times are clearly outlined by all major parties to the program. They are - Teaching Staff, AACE staff and Homestays. All of these groups of people can readily contact each other at any time and depending on the nature of the accident/emergency, relevant authorities such as police, hospitals and ambulances etc. can be contacted. Orientation materials include actions to be undertaken by students and families when an emergency occurs.
2. The ultimate person in charge is the Director of the Language Center, Ms. Dianne Martin. Though, the practical details of dealing with an emergency shall be directed by the program Manager - Dr. David Walton coordinated by the bi-lingual coordinator from the office of AACE.

In the event of a major emergency, AACE will be responsible for communication to Bunkyo University. This communication will come in Japanese. Bunkyo University will receive a daily report sheet (regardless of an emergency or not) on the program in Japanese when the staff member from Bunkyo University is not accompanying the students here in Australia. In the event of a major emergency, regularly updated communications by phone and fax will occur direct to Bunkyo University.

3. The notion of a part-time escort is one where we are fully supportive of. Our program is designed specifically to address the concerns of costs associated with participating institutions. Our bi-lingual support systems exist so that participating institutions do not have to send "escorts" at all. This enables the cost of programs to be reduced to students as they do not have to subsidise the cost of escorts. We have conducted large scale programs in which no escorts have joined the programs. Our analysis of these programs indicates no greater problems arose - as a result of escorts not attending.
4. No changes would be necessary to the program in the event an escort would not be able to attend the program. Given the structures of our support staff system, an escort plays a minimal role within the program. In fact, integration within existing classes would be less desirable as support staff resources are not available to elicit students in the same way they operate for specialist group programs.

Integrating students into existing classes has its advantages; namely with costs. Though, the disruption incurred by longer term students is a big negative. While one of the objectives to integration is "mixed nationality" classes; this is often offset by imbalances that result by a disproportionate number of Japanese attending certain classes. This though, does not rule out the practice of integration. It must be remembered that structures within the program directly enable students to make contact with local students regularly within small conversational groups.

Signed :



Matthew Mangano.

Director
AACE / Monash International.

June 23rd, 1998.

〈資料3〉

1998年 12月 9日

第1回 モナッシュ大学春期集中英語研修
参加者保証人各位

文教大学 国際学部長
宮本 倫好

拝啓

初冬の間、皆様にはご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、ご子弟の表記海外研修旅行につきまして、以下のことをあらかじめ了解くださいますようお願い申し上げます。

1. モナッシュ大学の受け入れ体制について

研修先のモナッシュ大学はメルボルン市に位置するオーストラリアの名門校です。表記研修では、春期休暇中を利用して小クラス制で英語集中訓練を受けます。また研修期間中は大学周辺のお宅に宿泊するホームステイ形態ですので、参加者にはこの研修を通じて英語能力の向上のみならず、オーストラリアに対する総合的理解を深めることを期待しております。

研修受け入れの所轄部署である同大学英語語学センターおよびAACBE（オーストラリア・アジア・コンタクト・エデュケーション）は、日本語を解するスタッフが複数配置され参加者への日暮的ケアにあっております。また、ホームステイ先の選定や監督の体制なども整っており、大学内外での怪我や病気の様子の対応も堅実です。さらにAACBEと文教大学は緊密に連絡をとりあっており、研修期間を通じての連絡体制も万全です。現地の治安は比較的稳定しており、事前オリエンテーションでの注意事項を守り、危険地区への徘徊や夜間外出を避けるなどの注意をすれば、安全についての問題はほとんど無いものと判断しております。

2. 研修旅行期間中の引率について

この研修旅行期間中の前半（2月21日～3月6日）につきましては、引率者として国際学部長奥田孝輔助教授が参加者同行いたします。

上記1のことから、私どもはこの研修旅行の引率については必ずしも必要の無いものと考えておりますが、環境が大きく変化する事態に対応するために、一定期間に限っての引率指導を行うことと致しました。したがって、文教大学国際学部としては研修についての引率指導を行うこと、研修期間後半についてのご子弟への連絡をモナッシュ大学に委任する形（「部分引率」）で表記研修を実施いたします。なお、参加者に万一の事態が発生した際には、私、国際学部長を本部長とする事故対策網が組織され（添付の図をご参照下さい）、特に引率者の不在の場合には速やかに現地と連絡のうえ、担当者を派遣いたします。

3. オプション企画期間中の責任体制について

この研修旅行は、文教大学国際学部が企画・主催し、JTB（株）日本交通公社 湘南藤沢支店が旅行取扱いる「手配旅行」です。ただし、オプション企画として日程表にのぼっているシドニー市内観光（3月19日～3月20日）についてはJTBが主催する企画ですので、文教大学としては実施責任を負うものではありません。オプション企画についての申し込みと同様される際には、この点にご留意願います。

4. 研修旅行期間中における事故責任の範囲について

参加者は期間中ホームステイをしますが、その間にはスポーツやショッピングなど、引率者やAACBEスタッフの目の届かない範囲で行動することも少なくありません。シドニー観光旅行についても同様です。

このように、参加者が引率者・管理者から離れて行動する際に、明らかに参加者個人の自由意志によると考えられる行動の結果、あってはならないこととはいえ、ご子弟に万一の事故が生じることがありましても、文教大学としては、その責任は当該個人に帰するものと考えております。

5. 旅行傷害保険加入の義務について

よりいっそうの安全を期するために、文教大学では学部が企画するすべての海外研修旅行の参加者には、旅行期間中「旅行傷害保険」に加入することを義務付けています。これにより参加者個人の責任による怪我や病気の際にも、経済的に過度の負担無く旅行先で医療機関を利用できるようになります。したがって、保証人各位におかれましては、ご子弟が信頼できる「旅行傷害保険」に加入なさるようご指導下さい。もちろん、「海外傷害保険」およびその加入手続きにつきましては、事前のオリエンテーションで十分説明いたし、資料も配布いたします。

以上のことをご了解いただけたならば、別紙の文書にご署名・ご捺印のうえ、文教大学湘南校舎「国際交流室」までお届け下さい。

この研修旅行が、ご子弟にとって素晴らしい体験となりますよう、心から願っております。

敬 具

研修旅行同意書

1999年 月 日

文教大学国際学部長
宮本 倫好 殿

第1回「モナッシュ大学春期集中英語研修」に関する実施体制、安全責任等について、別紙記載の諸事項を了解し、保証人として研修旅行への参加に同意いたします。

保証人氏名 _____ 印 _____

住 所 〒 _____

電話番号 _____

学生氏名 _____ 印 _____

学 籍 番 号 _____

連絡先住所 〒 _____

連絡先電話番号 _____

*勝手ながら、この文書は直接持参もしくは郵送にて、1999年1月22日（金）までに、文教大学湘南校舎 国際交流室（〒253-8550 茅ヶ崎市行谷1100）へお届け下さい。

第1回 モナッシュ大学春期集中英語研修
事故対策連絡網



